往復連載

ドーバー越えて

齋藤敦子
中野香織

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

㉘ 日本刀機内持ち込み可の世界

中野香織

「マカロニは元祖メトロセクシュアル」、なるほど、言われてみれば！　実はこれまで書かれてきたファッション史においては上品なヘテロ（異性愛）が大前提。で、多くはそれ以外の性などそしらぬ顔で「権力」や「富」ないし「階級」との関係を云々する歴史ばっかし。でもご指摘で、はっと思って「ゲイテイスト」をそこにあてはめてみると、おおっ、ブランメルしかりワイルドの唯美主義衣装しかりピーコック革命しかり、男性ファッション史における少なからぬ「事件」がメトロあるいはゲイテイストで説明しなおせることに気づきました。つまり、ファッション史を書き換えることができるってことですっ（鼻息）。いや失礼。

それはそうと「キル・ビル」では奇遇でしたね。アドレナリン放出しすぎで呆然、明かりがついても立ち上がれずにいたところに敦子さんのお顔を見つけてようやく現実に戻れました。転がる首手足、びゅーびゅー血しぶき、ユマとルーシーの珍妙な日本語、サムライ・ミーツ・カンフーなスタイル、まじめに興奮すべきなのか笑うべきなのか、もう自分の感覚すら制御不能でしたよ。批評家のどんな言葉も、ここまで映画偏愛を炸裂させたタランティーノの高笑いの前にはかき消えることでしょう。

「イン・アメリカ　三つの小さな願いごと」
12月シャンテ　シネほかにて
©2003 TWENTIETH CENTURY FOX

カット・井上陽子

キル・ビル・ワールドではユマ・サーマンが旅客機内に日本刀を持ち込んでいても、ま、この世界ならこれもありかと思えてしまえたんですが、その後ご一緒したジム・シェリダンの半自伝的映画「イン・アメリカ　三つの小さな願いごと」では生活感じっとりの映画だけに、細部のうそくささがひっかかりましたわね。「住民票ないのに産院で赤ん坊産んでどうする」とか、たえず意識が辛気臭い現実世界に引き戻されて。

たまたま同じ日に見ることになったこの二作を引き比べるのはまちがってますが、結果として一日の終わりに感じたのは、〈現実と地続きのリアリティよりも、パッション炸裂の大法螺（ほら）のほうが、有無をいわせぬ映画的説得力をもつことがある〉。

で、こじつけ癖が出て「映画」を「ファッション史」に置き換えてみました。ごく最近まで「存在しない」ことになっていたゲイの論理や、マッチョに封じ込まれて「ない」ことになっていたメトロの理念が登場しても、「ま、この世界ならこれもありか」と読んでもらえるような歴史ワールドがあらまほしいんですが、それには正史と地続きの修正版よりも正史から遊離した大法螺が有効そうか、と。とはいえ、タランティーノを見るかぎり、大法螺ふきってのはなろうと思ってなれるもんでもなさそうですが。